

二〇二〇年度

沖縄大学 一般入試（中期）

# 「国語」

## 問題用紙

・ 経法商学部 経法商学科

・ 人文学部 国際コミュニケーション学科

福祉文化学科

こども文化学科

・ 健康栄養学部 管理栄養学科

国語

※答はすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

思考とは反復であり、反復の①中核をなすのは偏差(ずれ)である。これはすなわち、思考は偏差から生まれるということにほかならない。では、ここで偏差と呼ばれているのはどのような事象なのか。一つの例で考えてみよう。

私たちの祖先も、猿やイノシシやノウマンゾウたちと同様、②トウシヨは身の回りにある植物や木の実やら他の動物やらを食物として採取・捕獲し、それで生きていたはずである。まだ農耕や③ボクククがはじまる以前の、狩猟・採集にもつばら生命の④イジを頼っていた時代を想像してほしい。あなたがそのような時代にこの世に生をうけたとしよう。今日あなたは、この丘の縁を流れる清流の浅瀬に群れるたくさんの魚たちを見つけ、それらを捕まえてお腹一杯食べることができた。満ち足りて眠りに就くことができた。元気に目覚めた翌日もまたその浅瀬に行くと、昨日と同様たくさんの魚たちが群れていて、お腹を充たすことができた。そうしたことが繰り返されたある日、いつものようにその浅瀬に行ってみると、いるはずの魚の群れがまったく見当たらない。川その付近をあちこち覗きまわっても、影もかたちもない。このとき、あなたの置かれた状況はどのようなものだろうか。想像をたくましくしてほしい。【A】、そのときあなたに訪れたのは、「当惑」と言つてよい状態

だろう。この当惑は、そこに当然あると思つたものがなくて、魚たちがいたなら当然なすはずの⑤捕獲という行為が⑥チュウに浮き、⑦狼狽しながら川の浅瀬の近くをうろろと歩き回るといふ行動として実現されるのではないか。そしてそのときあなたは、(言葉で表現すれば)「えっ、どうして?」という気持ちに襲われているのではないか。このときあなたに訪れた状況を「えっ、どうして?」と言葉で⑧ビョウシヤしたのは、もちろんすでに言葉が、すなわち思考が成立した後から振り返つてのことである。【B】いま問われているのは、どのようにして思考がはじまったか、すなわち思考の成立である。だがここで肝心なのは、あなたがまだ言葉をもっていないなくても、右に書いたような「当惑」の状態はいつでもあなたに訪れていたはずだ、ということなのだ。

注目したいのは、この「当惑」の中身である。【C】、そこで生じているのはどのような事象だろうか。それは、当然そうであると思われていた世界の特定の状態、そうであつて当たり前だったはずの世界のある状況が、必ずしもそうではなく、別様でもありえたこと、現に別様の世界の状態が出現してしまったことに対する「当惑」なのではないか。もう少し正確に言い直すと、別様の、異なつた、すなわち「ずれ」た(「ア」をともなつた)世界の新たな状態が出現してしまったことの認知が、⑨遡つてそれ以前の世界状態が必ずしも「当たり前」でも「当然」でもなかったことをあなたに気づかせ、当たり前前のことにはどう対応したらよいかよく分かつていたのに、それとは異なる状況が出現したためにこの新たな状況にどう対応したらよいかのすぐには分からず、「うろろろ」する、すなわち「当惑」するのではないか。私たち人間ばかりでなく、他の動物たちや生物たちにもすでに見

出すことのできるこの「うろろう」、『⑩右往左往』のもとには、世界が別様でありうろとうろとうこと、同じ世界でありながらそれが異なる仕方で出現しうろとうこと、すなわち「反復」という事態の成立がはつきり告知されてはいないだろうか。別の言い方をすれば、「偏差」あるいは「異なり」という事態を前にしたときの私たちの対応のもっとも基本的な在りようが、この「当惑」なのである。

では、この「当惑」と思考はどういう関係にあるのか。先の想定に戻って考えてみよう。いつも魚たちが群れていた浅瀬に今日は一匹の魚の姿も見えないという事態に⑪ソウグウしたあなたは、そのときどうするだろうか。あなたのもとでは当惑はもはや「うろろう」することでも「右往左往」することでもなく、「えっ?」という「思い」のもとに立ち止まることかもしれない。そのときあなたは、じつと腕組みしたまま「どうして?」と考え込むかもしれないのだ。あるいは、「どうして?」と自問しつつ、そのあたりを「うろろう」探し回るかもしれない。

いずれにせよここで決定的なのは、世界の異なる現出の前に、「えっ?」という当惑が「どうして?」という問いに接続されていることである。同一の世界が、同一であるにもかかわらず別様に姿を現わすとき、すなわち偏差が成立するとき、この偏差に対して私たちは「どうしてあのようにではなく、このようになるのか」と、たとえば「どうして昨日まではこの浅瀬にたくさん魚が群れていたのに、今日はこのように一匹も姿を見せないのか」と問いかけるといふ仕方で、向かい合うのである。ここに、「問い」という仕方で思考が立ち上がるのだ。(1) 偏差が思考という新たな次元の設立へといった つたのである。

そしてひとたび「問い」が立てられたならば、その問いは答えられねばならない。あなたは何らかの答えを求めて、思考をさまざまにめぐらすだろう。【D】「その浅瀬の石ころや岩に生えていた水草や⑫藻を魚たちは餌としていて、それをほぼ食べ尽くしたから他の浅瀬に移動したのだ」とか、「この魚たちは一定の時期になると川をさらに遡る習性があるのだ」といったように。このようにして思考の中で提出された答えは、それに基づいてあなたがどういう行動をとればよいかを指示するだろう。前者の答えに基づくなら、あなたは他の浅瀬を探しに向かうだろう。後者に基づくなら、川を上流へと真っ直ぐに遡るだろう。答えが正しかったか⑬否かは、それらの行動を通して明らかになる。正しくなかったら、そこでふたたびあなたは正しい答えを求めて考え込むことになるだろう。

【E】、私たちのもとで世界の偏差の前にひとたび思考が立ち上がったとき、その思考が開く次元はどこまで及ぶだろうか。先に見たように、思考は、世界があのようにではなくこのように現われ出るといふ事態を目の当たりにして、始動した。そうであれば思考はいまや、世界はそれが現にあるこのようにではなく、さらに別様にも現われ出るといふ可能性にも開かれたことになる。思考を思考たらしめているのは、この「可能性」ということではないか。可能性の空間が開かれることによつてはじめて、その中を動く思考もまた可能となったのではないか。先の例で言えば、浅瀬に魚がいなくなった事態を前にして「どうして?」と問いかけ、それに対してさまざまな答えの間をあらかれかと思案する思考にとつて、そのさまざまな答えはすべて「可能性」である。餌がなくなったから魚はいなくなったのか、川を遡上する習性のゆえになくなったのか、あるいはそれ以外の事情によるのかは、すべて思考にとつて、世界の可能な状態であるにすぎない。(2) 世界の可能な状態をさまざまに思い描くことで、思考がフル回転するのだ。逆に言えば、この可能性の空間が開かれたとき、すなわち浅瀬に魚がいなくなったのがどういふ事情によるのかが確定したとき、それは答えが与えられたことであると同時に、思考の終息をも意味する。もはやこの点についてあれこれ思案する必要は

ないし、その⑭ヨチもない。後は、その答えに基づいて行動するのみなのだ。

(斎藤慶典『哲学がはじまるとき——思考は何／どこに向かうのか』二〇〇七年、筑摩書房。ただし、一部改変した。)

問一 \_\_\_\_\_ 傍線部①から⑭の漢字にはひらがなで読みをつけ、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 【 A 【から】 E 【にあてはまるものを次のなかから選んで入れなさい。

【 たとえば おそらく いったい さて そして 】

問三 空欄（ア）に入る二字熟語として適切なものを文章中から抜き出して答えなさい。

問四 (1)「偏差が思考という新たな次元の設立へといったたつたのである」とあるが、そのことについて、文章中の言葉を用いて一〇〇字程度で説明しなさい。

問五 (2)「世界の可能な状態をさまざまに思い描くことで、思考がフル回転するのだ」とあるが、そのことについて、文章中の言葉を用いて一〇〇字程度で説明しなさい。

問六 この文章についてのあなたの意見や感想を二〇〇字程度で書きなさい。